

# ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子



## 第9回「ジャパンなるもの」

2年前の冬の日に舞い込んできた話が、すてきなご褒美のように思えたのは、その時風邪をこじらせて寝こんでいたからだったのでしょうか。フリーで映像の仕事をしている高校時代の同級生から、NHKラジオの企画担当者が、番組でナバホの話をしてくれないかと言っているとメールが入りました。「世界のジャパン・カルチャー」というコーナーで、アニメ、カラオケ、寿司、ラーメン、漢字、銭湯、ラジオ体操など、ナバホのレザバージョンでジャパン・カルチャーのなかが流行っているかを紹介してほしいとの依頼です。

結論から書くと、この話は、打ち合わせの段階で話がかみあわず、立ち消えになりました。水道がひかれていない家も多いというのに、銭湯なんて、と感覚のへだたりに不安をおぼえながら提案したのは、太平洋戦線で活躍したコードトーカーについての話題でした。ナバホ族の人々が、日本軍が決して解読できなかったナバホ語の暗号（コード）を民族の誇りとし、アメリカを勝利に導いた歴史を通じて、日本を身近に感じている様子についてなら、紹介してみたいと思ったからです。けれども、日本から届いたのは「（そういうことではなくて）そこに存在するジャパンなるものを紹介してほしい」という、事実上のお断りでした。

「昭和天皇が、日本はナバホ族に負けましたとおおせになったんだ」とゆずらない21世紀のナバホのおじさんにこそ、この地ならではのジャパンなるものが存在するのではないかとわたしには思えたのですが、オリンピック・パラリンピックの日本開催を控えて、世界中から集めた日本趣味を並べたいというディレクターの苦勞もわかるような気がして、反論はすこしにとどめました。「風前の灯火ともいえるナバホの文化を守りたいという意識を子どもたちは持っています。日本に限らず、他国の文化を積極的にとりいれて自分たちのあいだに流行らせると

いう動機づけが希薄ですし、そういう経済的な余裕もないのです」と。

「遠い東の涯の国でのこまごましい日常を、どんな文脈で伝えればうまく理解されるのだろう」と書いたのは、第二の故郷であるミラノに古い友人を訪ねようかと迷うイタリア文学者の須賀敦子さんでした。日本とイタリア、その両方を自分のなかに息づかせていた須賀さんには遠くおよばなくても、日本にナバホのことを伝えたいと望むなら、わたしがディネの懐に入らむとするのが先決でした。ひからびたような灌木がまばらに生えるばかりの砂漠と、濃いコバルト色の空は、四季の陰影に電飾や塗料が絡み合う日本の極彩色と比べている限り、永遠に退屈と見えていたからです。

教員住宅のキッチン窓からみえる岩山は、太陽の熱を鷹揚に受け止め、億単位の年月の蓄積を無造作に広げて見せてくれます。西日を受けると赤銅色に輝くその山のすそには幹線道路が走っていて、早起きした朝は、夜の明けきらないうちから子どもたちを迎えにいくスクールバスのテールライトの光跡がまっすぐ闇のむこうに消えて行くのを見ることができます。わたしがいま気に入っている、ナバホなる風景です。



生徒たちが日本語を印刷したTシャツを着ているのをこのごろ見かけるようになりました。